

グリルパルツァーの中世理解

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 國隆 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006099

Title	グリルパルツァーの中世理解
Author	松村, 國隆
Citation	人文研究. 53 卷 6 号, p.23-40.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	関越良平教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

グリルバルツァーの中世理解

松村 國隆

はじめに

グリルバルツァーの日記を読んでいると、ときとしてじつに興味深い箇所に出会うことがある。たとえば1835年から36年にかけての日記に、彼はひたすら中世ドイツ語の単語を数頁にわたって羅列し、かつその意味を丹念に書き留めている。¹ グリルバルツァーが中世ないし中世文学に関心を抱いていたことには言及されても、それを積極的に評価する紹介はこれまであまり聞かれない。かつて論者は「シュティフターの中世理解—『ヴィティコー』最終章をめぐる—」と題して『ドイツ文学論攷』に寄稿したが、そこでは文字通り中世を舞台にした叙事文学を彷彿させるような晩年の作品『ヴィティコー』(1865-67)をとりあげ、当時すでに中世文学への関心が薄れていた状況下で、なぜシュティフターがこのような作品を構想したのか、またどのように中世オーストリア、ひいては中世ヨーロッパを理解していたのかを論じた。² 本論の目的も、シュティフターとともにビーダーマイアー期オーストリアを代表する作家グリルバルツァーが、中世および中世文学についていかなる関心を抱いていたのか、またいかなる理解を示していたのかを検討することにある。

I

グリルバルツァーの劇作品は、おおよそ次の3グループに分類することができよう。第一のグループは幽霊劇や妖精劇(『先祖の女』、『夢もまた人生』、『メルジーナ』)、第二のグループは古代ギリシアに題材を求めた悲劇(『ザッフォー』、『金羊皮』、『海の波』、『恋の波』)、そして第三のグループは歴史劇(『オットカル王の栄光と最期』、『ハプスブルク家の兄弟争い』、『リブッサ』、『トレドのユダヤ女』)である。このなかで中世を舞台にした劇となると、わずかに『オットカル王の栄光と最期』ただ一作が遺されているのみである。こうした彼の創作活動から判断して、グリルバルツァーの関心はおよそ中世にはなかった、たとえ関心があったとしてもきわめて薄かったと言われてきたが、事実そうなのか。これが第一の疑問である。

19世紀前半にはドイツ・ロマン派が一世を風靡し、中世への憧憬や回顧が主題としてしきり

に論じられたし、実作として提示されもした。グリム兄弟だけではなく、アイヒェンドルフやブレンターノといった作家の名を挙げれば、そのことは十分に理解されるであろう。同じ時期のオーストリアでも、たとえば『祖国史年鑑』(1811-43)や『オーストリアのプルタルヒ』(1807-13)を著した歴史家ヨーゼフ・ホルマイアーはオーストリアの過去に光を当て、また三月前期のウィーン・サロン文学を代表する女流作家カロリーネ・ビヒラーは、オーストリアの中世を代表するバーベンベルク家の最後の君主をテーマにした『フリードリヒ戦闘公』(1831)を著している。しかしながら、1790年代生まれのグリルバルツァーは一般にヨゼフィニスムス、つまりオーストリア的啓蒙主義の洗礼を受けた作家であり、ドイツ・ロマン派の運動から距離をとっていた。したがって中世ないし中世文学の理解は十分でなかったというのが、これまでのオーストリア文学史の常識になっている。事実、ヘルベルト・ザイドラーはその著『オーストリアの三月前期とゲーテ時代』(1982)において、「グリルバルツァーは真剣に中世のドイツ文学との関係を得よう努めた。彼は読書し、書物の抜粋を作成し、また気がつくたびに、率直な見解を書き留めている。しかしローマ時代のゲルマン人は野蛮であり、その言語は中世を通じて粗野で無教養である、と彼は見なしている。そして『キリスト教的ナンセンス』が、中世における他のすべての無意味に道を拓くこととなった」³と述べている。グリルバルツァーにとって中世こそは蒙を啓くべき対象であり、これに積極的な評価を下すことなど到底できなかったのではないかと、言うのである。事実そうなのか。これが第二の疑問である。

II

ところで、前述の日記とともに、グリルバルツァーは中世文学への関心を示す書簡を遺している。その書簡は1850年5月に彼が大公フェルディナント・マクシミリアン(1832-1867)に宛てたもので、われわれはそれを草稿の形で読むことができる。少し長くなるが、書簡の内容をここに掲げる。

大公陛下！

このところ、わたしに――不当であるとは言いたくありませんが――じつに多くの名誉が与えられましたので、わたしはほとんど押し潰されそうな圧迫を感じております。勲章と立派な高杯、公的な認知と称賛は、一方では心を高揚させてはくれるのですが、他方では内に向けられた詩人の本性から遠く隔たった異質なもので、いな、心を混乱させるものです。よくお考えになった大公陛下の贈物は、陛下ご自身の若々しい真実な感激を表わす、根本思想から見て優れた好ましい詩節も添えられていましたので、人間にして詩人である者がわが家にいると感じるようなところに触れるものでした。

大公陛下！

わが齢は老境に近づいております。わたしはこれまでの体制が精神を敵視するなかで大いに苦しみました。そして勃興する新時代の到来が遅きに失しましたので、その時代そのものがわたしに成果をもたらすことはできません。けれどもオーストリアの未来に寄せるわたしの希望の一部を尊敬するあなたの頭上に置くことができますのを、わたしは今日しあわせに感じております。皇帝であられるあなたの兄上のお考えが、わたしたちの厳しい時代にあつて、内と外との安心のための配慮にあまりにも多く煩わされるでしょうから、避け難く必然的なものをものともせず、たえざる献身でもってその考えを伝えることが兄上には叶わないのです。兄上のお近くで、どうかあなたが芸術と学問の代理人であってください。月桂樹が開き、ハプスブルク・ロートリンゲン家が先輩であったバーベンベルク家の継承者であることのために、どうかご貢献なさってください。その家系が支配するなかで『ニーベルンゲンの歌』がわが祖国に誕生したのであり、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデが「オーストリアでわたしは歌うことと語ることを学びました」と告げることができたのです。

ミューズの神々が司る諸芸術は空虚な戯れではありません。戦士の死を恐れぬ心、市民の献身的忠誠、人生における偉大にして高貴なもの、それらはみな詩人や画家や音楽家の創造作品とその源を同じくします。— それは感動であり、この感動こそは永遠、正義、真実に対する人間のひたむきな心に他なりません。!

ここに登場する大公フェルディナント・マクシミリアンは、時の皇帝フランツ・ヨーゼフの弟にあたる。彼は1864年メキシコ皇帝に即位したが、1867年に当地で不如意な最期を遂げた、まさに運命に弄ばれた悲劇の主人公であった。彼はまた、芸術に理解のあつた人物としてつとに知られている。さしあたりわれわれは、書簡の宛先が大公であることを斟酌してその内容を理解しなければならないだろう。しかしながらここには、同じ作家仲間ではなかなか口にできないような内密なことまで語られている。なかでもグリルバルツァーの本心と受けとれる箇所として、冒頭で述べられた数々の顕彰による重圧を挙げることができるだろう。もともと華美や奢侈とは縁遠かつたグリルバルツァーにとって、こうした顕彰は半ば公的な儀式であつたとはいえ、またハプスブルク帝国の儀式偏重の国柄を承知していたとはいえ、作家としてのエートスと相容れないものであつたことは否めない。また、『嘘つく者に禍いあれ』(1838)の不評以来、この国に対する彼の不満や危惧の念のことを考慮すれば、これは至極当然な反応であつたと言えるだろう。しかしその一方で、この国の未来に寄せる彼の期待感もまたこの書簡には滲み出ている。政治ではなく芸術によって立つ国としてのオーストリア、文化国家として世界を先導するオーストリア、そうした彼の夢は死後に、つまり19世紀末から20世紀初頭にかけてのほんの一時期ではあつたが、とにかく実現した。いわゆる「世紀末ウィーン」の文化現象がそれである。彼がその源流をバーベンベルク家のオーストリアに見ていたことは、この書簡の後半で英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ

の名前が挙げられていることから明らかであろう。グリルバルツァーがこれら両者に言及したのは、いずれもただ中世における最も優れた作品のひとつであり、傑出した歌人のひとりであったというだけでなく、オーストリアに係わりの深い作品ならびに歌人として、つねに彼の心に懸かっていたことによるのではなからうか。

III

ブランカ・ホラチェクやフリッツ・ペーター・クナップも指摘しているように⁵、そもそもオーストリアにおいて中世語学・文学の研究が緒についたのは、プロイセンにおけるよりもかなり時代が下ってからのことである。したがって、グリルバルツァーはこの方面の文献に関する知識を、プロイセン経由で得ていた様子が彼の日記を通じて窺われる。因みに、プロイセンではすでに19世紀の前半に、ベルリン大学のカール・ラッハマンがドイツ中世の主だった作品の編集作業に着手していた。しかしながらその頃のオーストリアのギムナジウムでは、古い時代のドイツ文学、つまり古高ドイツ語や中高ドイツ語で書かれた文学作品は、授業のプログラム（カリキュラム）にはいまだ入っていなかった。また当時の帝国の各大学では、中世に関する専門教育もさほど重視されていなかった。つまり四八年革命以前のビーダーマイヤー期には、いまだ古典語を中心に据えた教養教育が幅をきかせていた。したがってグリルバルツァーが彼の学生時代に中高ドイツ語で著された中世文学に触れる機会はきわめて少なく⁶、日記から知る限りグリム兄弟やラッハマン、さらにはフォン・デア・ハーゲンの編集したテキストに依拠せざるを得なかった。

四八年革命以後ようやく中世研究（Mediävistik）が本格化するまでの経過は、おおよそ以下のように纏めることができよう。

当時のオーストリア帝国内の各大学では、ゲルマニスティクを担当する教授陣がおしなべて外国から招聘されたという事実が、オーストリアの実状をよく物語っている。たとえばクラカウ大学およびグラーツ大学のカール・ヴァインホルトはシレジアの出身、ブラハ大学およびウィーン大学のカール・アウグスト・ハーンはハイデルベルクの出身、ブラハ大学のヨーハン・ケレはバイエルンの出身、ウィーン大学のフランツ・プファイファーはスイス人であった。なかでもプファイファーは精力的に中世研究の推進を図り、プロイセンの影響や刺激を受けながらも、オーストリアにおける中世研究の基礎を固めたのであった。それでもベルリン大学の研究者たちの華々しい活躍に比べると、オーストリアの中世研究の実状は周縁的な現象に甘んじざるを得なかった。低地オーストリア出身のヴィルヘルム・シェーラーが登場するに至って、ようやくウィーンはベルリンに少し近づいたかに見えたが、それも束の間、彼はウィーン大学にはわずかに4年（1868-72）身を置いただけで自国オーストリアを離れ、シュトラースブルク大学を経てベルリン大学に向かったのであった。⁷

上述のごとく、19世紀前半から中葉にかけてのオーストリアにおけるゲルマニスティク事情は、ベルリンを中心とするプロイセン・ドイツのそれに比べるべくもなかった。従来の文学史の記述が看過していることではあるが、そのような状況のなかにありながらも、グリルバルツァーは独学で、しかも一時期きわめて熱心に、中世の歴史・語学・文学の世界を渉猟したのであった。おそらくこのことは彼の愛国心のみには帰するわけにはいかないだろうし、また単なる趣味の領域の営みとして無視するわけにもいかないだろう。冒頭で言及した中世語の語彙集、さらにはギリシア語の語彙集も他の箇所で見られるから、これは明かに作品の構想という準備段階に付随する現象と理解することもできるだろう。彼の温めていた作品構想のプログラムのなかには中世関係の題材や主題が含まれていたであろうことは十分に推察されるし、その一つがまぎれもなく『オットカル王の栄光と最期』であった。ただこの作品がボヘミアで観客の不興を買ってしまったことは、彼にとってみればまことに不幸なできごとであったと言わざるを得ない。バーベンベルク家からハプスブルク家へと連綿と続く歴史の流れを背景に、グリルバルツァーはいくらでもこうした題材や主題を展開することができたであろうのに、その結果を見ないままに終わってしまった。もっとも彼の中世文学への関心は、1807年と1809年にヨーゼフ・シュライフォークが編集者となった雑誌『ゾントークスブラット』(1807年)を通じて、いよいよ高められた。その証拠に、たとえば創刊号はフォン・デア・ハーゲン編纂の『ニーベルンゲンの歌』やアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの「ベルリン講義」を掲載しており、北方の情報は当時すでにウィーンでも容易かつ迅速に入手される状況にあった。⁸

IV

19世紀にはいってプロイセン・ドイツでは、ドイツ・ロマン派の中世憧憬に刺激され、とくにグリム兄弟を中心に高まった『ニーベルンゲンの歌』の文献学的研究は、ベルリン大学の碩学カール・ラッハマン等によって大いに進展した。グリルバルツァーはラッハマンの文献学的成果だけでなく、ブレスラウ大学ならびにベルリン大学で教鞭をとったフォン・デア・ハーゲンのそれにも接している。⁹ さらに19世紀前半はナポレオンに対する解放戦争を機にナショナリズムが台頭した時期であり、これに呼応するように、ヨーロッパ文学ないしは世界文学という試みではなく、ドイツ国民文学の歴史的記述といったものが誕生した。ゲルヴィーヌスの著書『ドイツ人の詩的国民文学の歴史』(1835)は、まさにそうした時代の潮流を代表する著作であった。¹⁰ 典型的なヨーゼフ主義者であった父親のもとで厳格な教育を受け、ヨーゼフ主義の申し子であることを自認していたグリルバルツァーは、ゲルヴィーヌスの文学史を手放しで迎え入れたわけではなかった。「あまりに無批判な称賛とあまりに拒絶的な非難とのあいだの中間の道」¹¹を歩もうとするグリルバルツァーは、この著者のロマン主義と民族主義に傾斜する態度には批判的であった。そうは言いながらも、彼もやはり18世紀末から19世紀前半へと

移りゆく歴史の流れのなかで生きていた。そうした状況下で、彼にゲルマン世界を題材にした中世の作品に眼を開くきっかけを与えてくれたのは、上記のプロイセンの文献学者や文学史家たちであった。すでに述べたように、ここオーストリアでは中世研究の伝統は育っていなかったため、彼はいきおい北方の知識人たちの成果に頼ることにならざるを得なかった。¹²

1832年に宮廷公文書室長に任命されると、グリルバルツァーには文学活動のための時間的余裕ができた。それ以来、彼は幅広く哲学や文学の研究に没頭することとなる。彼が『ニーベルンゲンの歌』に取り組んだのも、この頃、すなわち1830年代の半ばとされる。ちょうど、先のゲルヴィーヌスの『ドイツ人の詩的国民文学の歴史』が世に出た年とも符合する。彼はフォン・デア・ハーゲンの編纂になる『ニーベルンゲンの歌』の第3版（語彙集付き）を購入し、これを底本に英雄叙事詩の読書と研究に集中することにより、次々と自らの見解を述べる機会を得た。¹³

そしてそのなかには、その後の『ニーベルンゲンの歌』研究の先駆けをなすものも少なくない。その代表的な見解として

- 1) ジークフリート（ジーフリト）はウォルムスへの旅以前にブリュンヒルト（ブルンヒルト）を知っていたこと、
- 2) ジークフリートには野心的な本質が仄見えること、
- 3) クリームヒルト（クリエムヒルト）の性格が第2部で変貌する前兆は、すでに第1部でも見られること

を挙げることができよう。これら3点について、グリルバルツァーが自らの見解をどのように展開しているのかを紹介し、かつそこで示された問題点を当該のテキストに即して明らかにしたい。

1) の見解はグリルバルツァーの批評家としての眼識の確かさを窺わせるもので、この挿話は『ニーベルンゲンの歌』において初めて登場するのではなく、もともとはゲルマン神話に見られる異国の話であったものが、この英雄叙事詩に援用されたという。¹⁴ ブルグンドのグンテル王がアイスランドのブリュンヒルトに結婚を申し込む際に、ジークフリートがグンテル王を諫め、かつ忠臣ハーゲン（ハゲネ）が王に助言を与えている箇所とも関連している。

330 «Daz wil ich widerrâten», sprach dô Sîvrit,
 «jâ hât diu kûneginne sô vreisliche sit,
 swer umb' ir minne wirbet, daz ez im hôhe stât.
 des muget ir der reise haben wærlichen rât.»

331 «Sô wil ih iu daz râten», sprach do Hagene,
 «ir bittet Sîvrîde mit iu ze tragene
 die vil starken swære, daz ist nu mîn rât,

sit im daz ist sô kündeç wi ez um Prünhilde stât.」¹⁵

「それをおやめになるよう、ご忠告いたします」とジーフリトは言った、
「あの女王はじつに恐ろしい方で、
彼女に求愛する者をひどい目に遭わせます。
それゆえ今度の旅は是非ともお止めいただきたい。」

「ではわしの考えを申し上げよう」と、そのときハゲネが言った、
「ジーフリト殿がそなたとともに、かくもひどい重荷を
担っていただくようにお頼みなさるがよろしかろう、
ジーフリト殿はブリュンヒルトのことをよく知っておられるからのう。」

つまりジークフリートはグンテル王に会う以前に、ブリュンヒルトを知っていた、いな、かつてともに暮らしたのである。たとえば、『ヴォルスンガサガ』は『ニーベルンゲンの歌』より50年ほど後に成立したと言われるにもかかわらず、『エッタ』に断片で残されたニーベルンゲン伝説の古い層が認められる。上掲の挿話のもとになる箇所も、『ヴォルスンガサガ』には異なる筋立てで収録されている。話の内容は、恋仲になったシグルズ（ジークフリート）はブリュンヒルト（ブリュンヒルト）と結婚を誓い合いながら（第22話）、また彼女との間にアスラウグという名の娘まで設けておきながら（第29話）、グンナル（グンテル）王の母親であるグリームヒルト（ウーテ）によって蜜酒を飲まされ、ブリュンヒルトのことをすっかり忘れて、ついにはグズルーン（クリームヒルト）と結婚してしまう（第28話）、というものである。¹⁶ この点についてはフォン・デア・ハーゲンが1820年に出版した『ニーベルンゲンの歌』第3版（同年）の序文ですでに明らかにしているし、またヴォルフガング・モールは『トリスタンとイゾルデ』におけるトリスタンのアイスランド航行に関連づけて論じている。¹⁷ 確かに上記のジークフリートの発言は、彼とブリュンヒルトとの深い関係なしには考えられない。ここで彼は、むしろグンテル王のアイスランド航行を諫めている。世故に長けたハーゲンは、すでにジークフリートがウォルムスに到着する前に、この勇士とブリュンヒルトに関する情報を得ていたに相違ない。だからこそ、彼はジークフリートの同伴をグンテル王に進言したのであった。そしてこの場の状況は、すでにその後の悲劇的結末を暗示しているようにすら思われる。それというのも、ここで初めてグンテル王を間にしてジークフリートとハーゲンの対立という構図が提示されているからである。ジークフリートはアイスランドへの旅において勲功を立てグンテル王から絶大な信用を得るが、他方ハーゲンの眼にはジークフリートがいよいよ危険な人物として映ることになる。

2) の見解については、次の箇所が問題になってこよう。

865 Zuo der rede kómen Ortwin und Gêrnôt
 dâ die helde rieten den Sîfrides tót.
 dar zuo kom ouch Giselher, der edelen Uoten kint.
 do er ir rede gehôrte, er sprach getriuliche sint:

866 «Ir vil guoten recken, war umbe tuot ir daz?
 jane gediente Sifrit nie alsolhen haz
 daz er dar umbe solde verliesen sînen lip.
 jâ ist es harte lihte, dar umbe zürnent diu wîp.»

867 «Suln wir gouche ziehen?» sprach aber Hagene;
 «des habent lützel ère sô guote degene.
 daz er sich hât gerüemet der lieben vrouwen mîn,
 dar umbe wil ich sterben, ez engê im an daz leben sîn.»¹⁸

勇士たちがジーフリトの命を奪おうと謀っていたところへ
 オルトヴィーンとゲールノートがやって来た。
 そこへ高貴なウオテの息子、ギーゼルヘルも加わった。
 彼はみな話を聞くと、やがて真心からこう言った。

「あなたがた立派な勇士諸君がどうしてそんなことをなさるのか。
 ジーフリト殿は命を奪われるほど
 ひどい憎しみを買うような方ではけっしてない。
 女どもは得てしてそんなつまらぬことでいがみ合うのです。」

「われわれは私生児を養うべきかのう」とハゲネが言った、
 「それは立派な武士の名誉とはなりませんまい。
 お妃さまのことを自慢にしたとあっては、
 彼の命が消えるのでなければ、わしは死にとうござる。」

ここに展開されるギーゼルヘルとハーゲンの見解の相違は、やがてハーゲンの勝利に終わり、
 話の本筋はジークフリート暗殺に向かって進行する。この箇所ではハーゲンがジークフリートの
 ことを「私生児 (gouche)」呼ばわりしているが、もともと「郭公 (カッコウ)」を意味するこ

の語が、他の鳥の巣に自分の卵を産みつける郭公の習性から、「情夫」とか「私生児」の意にも転用される例である。このことからハーゲンのジークフリートに対する不信の念は自から明かであろう。さらに、グンテル王とブリュンヒルトとの初夜の床の一部始終、つまり自らが介在した秘密をクリームヒルトに漏らすというジークフリートの何とも軽率な行為が、結果として礼拝堂前でのブリュンヒルトとクリームヒルトとの口論を招いたのであるが、その際ジークフリートの軽率さだけでなく、彼が自らの軽率な行為を「自慢にした (sich hât gerüemet)」という表現にも注目したい。まさにここに、ゲルマン神話におけるシグルズの矛盾に満ちた古い英雄像が見え隠れする。¹⁹ グリルバルツァーはこの原ジークフリート像を知悉していたがゆえに、上述のごとき見解を披露することができたのであろう。事実、1813年にカッセルで刊行されたグリム兄弟の共著『古きドイツの森』を彼は読んでおり、そこには「ジークフリートがおそらくはスカンディナヴィア地方のシグルドを受容したものである」²⁰ とあり、彼はかなり早い時期にその点に注意を向けていたと考えられる。いずれにしても神話の世界を彷彿させる『ニーベルンゲンの歌』第1部にあっては、ハーゲンひとりが神話的世界から抜け出た存在として孤軍奮闘している。この点では第1部と第2部のいずれにおいても、知将ハーゲンは一貫して人間の目線が届くところで働いていると言えはしないだろうか。

3) の見解を裏づける箇所は『ニーベルンゲンの歌』第11歌章691節3行目および696節4行目である。そこではクリームヒルトが2度にわたって領土の分配に言及している。

691 Si sprach zu zir manne: «wenne sul wir varn?

daz ich sô harte gâhe, daz heiz' ich wol bewarn.

mir suln ê mine brüeder teilen mit diu lant.»

leit was ez Sifride, do erz an Kriemhilt ervant.

696 Dô sprach diu vrouwe Kriemhilt: «habt ir der erbe rât,

umb Burgonden degene sô liht' ez niht enstât,

si mûg' ein künic gerne fûeren in sîn lant.

jâ sol si mit mir teilen mîner lieben bruoder hant.»²¹

彼女は夫に話した、「いつわたしたちは出発するのでしょうか。

わたしがかくも急ぐことは、差し控えましょう。

わたしの兄たちはわたしに領地を分け与えてくれますから。」

クリエムヒルトからこれを聞いたとき、ジークフリートは情けなくなった。

そのとき王妃クリエムヒルトが語った、

「あなたは領地など要らないとおっしゃいますが、ブルゴントの武士たちのことはそう容易ではありません。王たる者はすすんで自らの国に彼らを連れて行くべきです。わが兄たちは武士たちを分け与えてくれるでしょう。」

ここで問題になるのは、まずクリームヒルトの物質的な欲望であろう。彼女は「領地 (lant)」のみならず「武士 (degene)」が分与されるであろうことを強く望み、ジークフリートをいたく落胆させている。しかしグリルバルツァーはそのことだけに関心を抱いたのではなく、ここに『ニーベルンゲンの歌』の作者の卓越した構成能力をも読み取っている。すなわちこの箇所について、グリルバルツァーは「ジークフリートとともに出立する際に、クリームヒルトの性格がのちに邪悪になることがいかに賢明に用意されていることだろう。そのとき彼女は父祖の領地を兄弟たちと分かち合おうとしている」²²と述べている。神話的世界が展開される前者と歴史的世界を巧みに取り入れた後者とのあいだには、おのずから物語それ自体の性格上の相違が浮上する。それにもかかわらず、グリルバルツァーは『ニーベルンゲンの歌』第1部と第2部がひとつの全体、壮大な叙事的世界を構築していると見る。つまり彼にとって英雄叙事詩の最大の魅力はまさにこの構成原理にあり、それに従って組み立てられた構築物としての作品にあった。²³

総じてグリルバルツァーが中高ドイツ語で記された『ニーベルンゲンの歌』に取り組んだ姿勢は、ただ作品の表層を撫でるだけの生半可なものではなく、きわめて真剣なものであった。集中力と忍耐力をもって作品の本質に迫る彼の熱意が、日記や書簡の行間から十分に読み取ることができる。彼はまたこの作品がゲルマンの神話と深く係わっていることを具体的な描写や語法から嗅ぎ取ると同時に、この作品が内包する壮大な構築性に魅了されたのであった。それはまた、この作品の大きな魅力でもある卓越した叙事性と言い換えても差し支えないだろう。

V

グリルバルツァーのいまひとつの関心事は、ドイツ最大の恋愛歌人（ミンネゼンガー）といわれるヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデとその作品であった。しかも彼がヴァルターと取り組んだのは、『ニーベルンゲンの歌』に関する各種文献を渉猟したのとほぼ同じ時期、つまり1830年代から40年代にかけてであり、グリルバルツァーの中世文学への関心と読書がこの時期に集中していたことが確認されよう。たしかに、ヴァルターは彼自身の歌のなかで、「わたしはオーストリアで歌うことと語ることを学んだ (In Österreich lernt ich singen und sagen)」(L 32, 14) と自らの経歴を披瀝しており、そのことが近代オーストリアの劇作家グリルバルツァーの中世文学のみならずその歌人たちへの関心を高めたであろうことは、想像に難

くない。もっとも、ここでヴァルターのいう「歌う」とは「恋愛歌謡」の世界の消息を指しているのに対して、「語る」とはけっして「叙事文学」ではなく、「格言歌謡」の世界のことを意味している点には留意すべきであろう。²⁴

それではグリルバルツァーはいったいヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデというオーストリアで活躍した歌人をどのように理解し、また彼の歌謡をどのように位置づけていたのであろうか。その点に関して最も多くの資料を提供してくれているのは、やはり『ニーベルンゲンの歌』の場合と同様に、グリルバルツァーの書簡であり、日記である。ここでそのなかからいくつかの事例を引用してみよう。

ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデはオーストリア人であったこと、またかの有名な歌の1行（「オーストリアでわたしは歌うことと語ることを学んだ」）のほかに、「ニュルンベルクでの裁き」（L 84, 20）に言及した歌の1行もある。ここで彼はニュルンベルクに集まった者たちが気前のよい態度を示さなかったことについて嘆き、次のように結んでいる。わが国の殿方はまことに宮廷に適った作法を弁えておられるので、リウポルト公が客人でなければ、殿おひとりが施さなければならなかったろう、と。（1835年5月から6月にかけて）²⁵

ここで紹介されているのは、恋愛歌ではなく、格言歌であることに注目したい。中世最大の恋愛歌人の有名な恋愛歌、たとえば「菩提樹の下で（Under der linden）」（L 39, 11）が掲げられるのであれば、何の不思議もない。しかしグリルバルツァーは敢えてヴァルターの格言歌を採用した。歌の性格上、格言歌には当時の状況を反映した歌が少なくなく、オーストリアという国の名も類出する。その典型例が前者（L 84, 20）であり、これは繰り返し典拠として引用されて、すでに人口に膾炙している。しかしながら後者については馴染みがなく、少し補足説明をする必要があるだろう。

L 84, 14
 Si frâgent mich vil dicke, waz ich habe gesehen
 swenn ich von hove rîte, und waz dâ si geschehen.
 ich liuge ungerne, und wil der wârheit halber niht verjehen.
 ze Nüerenberc was guot gerihete, daz sage ich ze mære.
 umb ir milte frâget varndez volc: daz kan wol spehen.
 die seiten mir, ir malhen schieden dannen lære:
 unser heimschen fürsten sint sô hovebære,
 daz Liupolt eine müeste geben, wan daz er ein gast dâ wære.²⁶

わたしが館から馬で出かけると、彼らはしばしばわたしに尋ねます、
わたしがそこで何を見たのか、またそこで何があったのか、と。
わたしは嘘をつくのをお好みませんし、真実を生半可に語りたくもありません。
ニュルンベルクの館では立派な裁きが行われた、と申し上げます。
殿方の施し心については遍歴の民に聞いて下さい。
彼らは物事の本質を見抜く術を心得ていますから。
彼らはわたしに言いました、自分たちの革袋は空のままそこを立ち去った、と。
わが国の殿方はまことに宮廷に適った作法を弁えておられるので、
リウボルト公が客人でなければ、殿おひとりが施さなければならなかったろう、と。

歴史的事実から言えば、1224年7月23日ニュルンベルクで、ケルン司教エンゲルブレヒトの司会のもとに開催された諸侯会議 (Hoftag) か、エンゲルブレヒト殺害直後の1225年暮に開催された諸侯会議なのか、意見の分かれるところであるが、この歌はそこにヴァルターが臨んだときの体験に基づいて生まれた格言歌である。前半の数行は正しい裁きがそこで下されたことに言及しているが、後半はヴァルター特有のアイロニカルな表現に終始している。つまり、こうした公の会議には「遍歴の民 (varndez volc)」が集まり、その場で君主諸侯たちは自らの「施し心 (milte)」を彼らにも披露するのがつねであった。²⁷ ところが、この会議では彼らの口から不満の声が聞かれ、ヴァルターはそれをたまたま耳にした、あるいはその現場に居合わせたということであろうか。形容詞「宮廷に適った作法を弁えた (hovebare)」には、本来「施し心」という徳目も含まれているのに、もはやここではそれが通用しない。それが通用していれば、「遍歴の民」の不平不満の声は聞かれなかったはずであるが、実際には宮廷の雅び心が地に墜ちた状態にあったことを、ヴァルターはいやがうえにも聞き手に意識させている。ここには「わが国の殿方 (unser heimschen fürsten)」が誰であるのかという厄介な問題も残るが、その詮索には立ち入らない。この歌でヴァルターは、豊みかけるように、ひとりオーストリア公レオポルトのみがこの美風を守らなければならなかったのに、客人であったがゆえに施しをする立場にはなかった、つまり施しをしなかったと結んでいる。²⁸ 前オーストリア公フリードリヒ1世に歓迎されたヴァルターではあったが、その弟レオポルト6世とは確執が続き、必ずしも良好な関係にはなかった。ただし彼がこの歌を披露した頃にはすでに皇帝フリードリヒ2世から采邑を拝領していたと伝えられ、オーストリア公とヴァルターとの関係は落ち着くべきところに落ち着いていた。しかしギュンター・シュヴァイクレは、この箇所をむしろオーストリア公レオポルト6世ならびにその宮廷に対するヴァルターの痛烈な批判として解釈している。つまりここではオーストリア公の吝嗇ぶりが裏返しの形で語られており、パトロンであるべき君主と歌人ヴァルターがのっぴきならない関係にあったことから、ヴァルターはこのように手の込

んだ歌を作ったのであろうと。²⁹ しかし、グリルバルツァーが当時置かれていた不如意な状況はともかくとして、オーストリア公を前面に引き出しているのは、まさに当時の皇帝フランツ・ヨーゼフに崇敬の念を抱いていた彼の心情からすれば、彼はこの歌を肯定的に理解していたと理解して差し支えないであろう。いずれにせよ、ヴァルターの難解な格言歌が彼の日記に書き留められたことは注目に値する文学史上のエピソードであり、さまざまなコンテクストから読み解かれるべきであろう。

いまひとつの格言歌 L 31, 13についても言及しておく必要がある。

Ich hân gemerket von der Seine unz an die Muore,
 von dem Pfâde unz an die Trabe erkenne ich ir aller fuore.
 diu meiste meinige enruochet, wie sî erwirbet guot.
 sol ichz alsô gewinnen, sô gâ slâfen, hôher muot.
 Guot was ie genæme, iedoch sô gie diu êre
 vor dem guote. nû ist daz guot sô hêre,
 daz ez gewaltekliche vor ir zuo den frowen gât,
 mit den fürsten zuo dem künige an ir rât.
 sô wê dir, guot, wie rœmisch rîche stât!
 dû bist niht guot, dû habest dich an die schande ein teil ze sêre.³⁰

セーナからムーアまでをわたしは観察しました。
 ポーからトラヴェまで人々の暮らし振りをよく知っています。
 いかにか財貨を入手するかについて、たいていの者は無頓着です。
 わたしも財貨をこのように入手すれば、わが心よ、眠りに就きたまえ。
 かつて財貨は好ましいものでした。けれども名誉が先んじていました、
 財貨よりも。しかし今では財貨がじつに貴いものですので、
 財貨が堂々と名誉に先んじて婦人方のところに行きます。
 諸侯とともに王様の協議にも口を差し挟みます。
 財貨よ、そなたは禍なるかな！（神聖）ローマ帝国はどうなっているのですか。
 そなたはよろしくありません。そなたは恥辱に近づきすぎます。

「不機嫌調 (Unmutston)」に属するこの格言歌は、世を憂う歌の一種である。とくに財貨が大手を振って闊歩し、名誉が小さくなってそのあとに随き従っている時代にあっては、すべてが倒錯の形をとらざるを得ない。そこにヴァルターの悲哀と痛恨の眼差しが注がれる。歌人はヨーロッパを、とりわけ神聖ローマ帝国を遍歴していたと伝えられているが、その行程がい

かなるものであったのかを知る手がかりは、彼の格言歌のほかには遺されていない。われわれはそれをただ推測するほかない。最初の教行に河の名前がいくつか登場しているが、彼自身がじっさいそこに足を踏み入れたのかどうか。パリを貫流するセーヌ河、シュタイエルマルクを流れるムーア河、イタリア北部を西から東へ流れるポー河、さらには北ドイツのリュエベック近郊のトラヴェエ河と、いずれも架空ではない現実の河の名称である。ただここでは神聖ローマ帝国をくまなく訪れたことを、歌人として言いたかったのであろう。なぜならこれら4つの河川は、帝国の西、東、南、北の境界に位置するのだから。³¹ なかでもセーヌ河については、ヴァルターがパリに逗留したかどうかということとも関連して、これまでにもしばしば論じられてきた。グリルバルツァーはヴァルターのパリ逗留を事実として日記に書き留めている。

この学派の長所を記述すれば、あまりにも膨大なものになると言ってよい。ペーター・フォン・コルバイユは彼（イノツェンツ3世）の先生であった。彼はこの先生を、サンスの大司教に推挙した。ギリシア人たちのテキストを原語で読んだとすれば、そして古典詩人たちを愛したとすれば、自ら韻文で書くことも試みたであろう。「聖霊よ、来たれ (Veni sancte spiritus)」と「十字架のもとに立てる聖母 (Stabat mater)」を彼の作である、とある者たちは言っている。ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデは同じ時期にパリにいた。

(1835年初め)³²

この記述は、ヴァルターがパリに滞在したこと、またそのころ彼はソルボンヌ大学で学んでいた若き学徒、のちのイノツェンツ3世(1160-1216、在位1198-1216)と交流があったことも暗に示すものである。グリルバルツァーがフリードリヒ・フルターの著『イノツェンツ3世』を精読しており、それに依拠した記述であるとホラチェクは理解しているが、³³ ヴァルターの歌謡からは彼がパリに逗留したことや当時イノツェンツ3世と交流があったことを匂わせる何の手掛かりも得られていない。しかもイノツェンツ3世時代に教皇世界がその絶頂期を迎え、彼は神聖ローマ皇帝やドイツの諸王とことごとく対立し、ラテランの公会議まで主宰したことを考えれば、教皇派に敵対し、皇帝やドイツの諸王の側について歌ったヴァルターとイノツェンツ3世との接点はなかなか見出し難い。むしろその反証である教皇批判をヴァルターが格言歌に盛り込んだことはよく知られている。たとえばL 33, 22は、明らかにイノツェンツ3世批判を前面に打ち出した格言歌である。³⁴

ところで、グリルバルツァーはヴァルターをどのような歌人として捉えていたのであろうか。そのヒントは、彼がヴァルターの恋愛歌ではなく格言歌をしばしば引用していることに認められるように思われる。つまり彼は同じ抒情の世界でも、心情ではなく理知がかつた世界に軸足を置いていたというのである。この点に関して、グリルバルツァーはこう述べている。

ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデを本来的な歌人と呼ぶことができるかどうか、それはなお疑わしい。詩的な情熱と幻想（想像力）がほぼ完全に欠けている。彼は悟性と感情を拒むことができない。彼はその大部分が反省の歌人であるか格言の歌人である。ときおり彼はうまい表現を用いているが、しかしそれは稀なことである。

（1845年から46年にかけて）³⁵

この日記を読んでいる、論者はじつに奇妙な感覚に襲われた。というのも、ほぼこれと同じ内容の文章に出会ったことがあったからである。それは、グリルバルツァーが友人であったエルンスト・フォン・フォイヒタースレーベンに贈ったオマージュである。煩を厭わずにここに掲げることをお許しいただきたい。

ところで、彼の青年時代の最初の活動は詩作であった。知性と感性に関しては、多くの詩人たちの先頭に立っていた。けれども想像力がこれに伴わなかった。他人が彼にそのことを気づかせたのではなく、彼自身が成年に達したとき、そのことに気づいたのであった。そして彼は自分自身に対する苛酷な審判者であったので、いかなる詩的天分も自らに認めなかった。わたしは何度も彼に話そうと思った、内省的なものや箴言的のものはたしかに詩（ポエジー）の本筋ではないが、それもやはり詩なのだ、と。しかしながら彼は毅然とした態度を崩さず、自らを断罪したのであった。³⁶

グリルバルツァーの「詩（Poesie）」に対する思い入れは深く、ここに記されているように、「詩」の世界はおのずから溢れ出る「想像力（Phantasie）」と「詩狂（furor poeticus）」を糧としていると理解していた。³⁷ 青年時代からグリルバルツァー自身、詩才に恵まれているかどうかを自問しつつ詩作に励んだが、「想像力」はともかくとして、「詩狂」は持ち合わせていないと述べ、さらに「詩作によって他の詩人たちの心は熱くなるのに、ぼくの心は冷めている」³⁸とも告白している。「詩狂」とは言い得て妙である。狂気と背中合せの境地であり、そこに至って初めて本来の「詩」の世界に生きることができると言う。これはまた、ギリシア以来ヨーロッパに一貫して流れる伝統的な詩精神の理解でもあり、かくのごとく厳しく詩精神を理解した結果、フォイヒタースレーベンと同様、彼もまた詩の世界から遠ざかることになる。すなわち、彼も「詩の本筋ではない」「内省的なもの」や「箴言的のもの」において優れた詩才を発揮したのであった。翻ってグリルバルツァーがヴァルターの歌を規定する際にも、とくに恋愛歌ではなく格言歌を重視していたことから明らかなように、時代を隔てながら、じつはこの歌人に自らの姿を見ていたのではなかっただろうか。ちょうど、同時代人フォイヒタースレーベンへのオマージュに自らの姿を重ねたように。

グリルバルツァーによるヴァルター理解に論者は必ずしも異を唱えるわけではないが、こ

にはやはり牽強附会と映る表現が認められる。それというのも、ヴァルターの恋愛歌には隣国フランスのトゥルーバドゥールの影響を受けつつも、すでに彼独自の世界が展開されている。たとえば「自然序詞」の用法を仔細に見れば、その大胆な発想と形式の独自性は唯一無比のものである。³⁹ 彼の歌謡はけっして内省的で箴言的な傾向からのみ解釈されるものではなく、むしろ抒情の根本にかかわる心情、つまり想像力によって支えられた大胆な表現が少なくない。ところがグリルパルツァーは、自らに引き寄せてヴァルターの歌謡を理解しようとした。その限りにおいて、ヴァルターとその歌謡に関する彼の理解があまりにも主観的であったことは否めないし、その点で彼の見解には聊かの物足りなさを感じざるを得ない。しかしまだ本格的な中世研究が始まっていなかった当時のオーストリアにおいて、グリルパルツァーがいち早くヴァルターの歌謡の本質に肉薄した功績はいくら高く評価しても評価しすぎることはない。それはドイツにおけるウーラントの功績と同等に扱うことはできないとしても、その精神と志向において両者にはきわめて類似した傾向を認めることができるだろう。

以上、論者はグリルパルツァーの中世理解の一端を、彼の書簡や日記を手掛かりに見てきたが、われわれの想像をはるかに超えて、彼はドイツ語圏の中世世界に深く係わり、かつその世界に沈潜し、とくにオーストリアに関係する作家や作品について評価した。残念ながら、グリルパルツァーがヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『バルツイヴァール』と取り組んだ経緯とその意味については、本論では割愛せざるを得なかった。⁴⁰ というのも本論では、主として19世紀前半から中葉にかけてのオーストリア、とくにウィーンにおける中世研究の動向と関連させながら、グリルパルツァーの中世理解を論じたために、このテーマが視野に入って来なかったというだけのことで、まったく他意はない。このテーマの論究については他日を期したい。

註

- 1 Vgl. Franz Grillparzer: *Sämtliche Werke* (SW). Hrsg. von August Sauer. Wien 1900ff. Teil 2, Bd. 9 (Tagebücher III, Nr. 2776). S. 295ff. u.a.
- 2 拙論「シュティフターの中世理解—「ヴィティコー」最終章をめぐる—」『ドイツ文学論攷』31号(1989年)所収, 45-63頁参照。
- 3 Herbert Seidler: *Österreichischer Vormärz und Goethezeit. Geschichte einer literarischen Auseinandersetzung*. Wien 1982. S. 330.
- 4 SW III/3 (Briefe und Dokumente III, Nr. 709), S. 64f.
- 5 Vgl. Blanka Horacek: *Die Rezeption mittelhochdeutscher Dichtung durch Franz Grillparzer*. In: *Die österreichische Literatur. Ihr Profil an der Wende vom 18. zum 19. Jahrhundert (1750-1830)*. Hrsg. von Herbert Zeman. 2 Teile. S. 735-772. Graz 1979; Fritz Peter Knapp: *Die altdeutsche Dichtung als Gegenstand literarhistorischer Forschung in Österreich von Jacob Grimms Wiener Aufenthalt (1814/15) bis zum Tode Franz Pfeiffers (1868)*. In: *Die österreichische Literatur. Ihr Profil im 19. Jh. (1830-1880)*. Hrsg. von Herbert Zeman. Graz 1982. S. 144f. 前者の論者ホラチェク教授はすでに第一線を退いているが、永年ウィーン大学で中世文学を講じ、ビルカーン教授、ヴァージンガー教授とともに、ウィーン大学の中世語学・文学研究の一翼を担ってきた。その堅実な研究には定評があり、オーストリア文学史の再構築を目指す論集等でも、文献学的考察をもって寄与している。また、後者の論者クナップ教授はウィーン大学で教鞭をとったあと、新設のバツサウ大学を経て、現在キール大学の中世語学・文学の講座を担っている。とくに近世・近代における中世受容というテーマに関する限り、クナップ氏はその第一人者と言えよう。
- 6 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 735f.
- 7 Peter Wiesinger/Daniel Steinbach: *150 Jahre Germanistik in Wien. Außeruniversitäre Frühgermanistik und Universitätsgermanistik*. Wien 2001. S. 19-45.
- 8 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 747f.
- 9 Karl Lachmann (Hg.): *Das Nibelungenlied*. Nach der Handschrift A. Berlin 1826; Friedrich Heinrich von der Hagen (Hg.): *Der Nibelungen Lied in der Ursprache mit den Lesarten aller Handschriften und Erläuterungen der Sprache, Sage und Geschichte*. Bd. 1, Breslau 1820.
- 10 Georg Gottfried Gervinus: *Geschichte der poetischen Nationalliteratur der Deutschen*. 5 Bde. 1835-42. (Bd. 1. Leipzig 1835)
- 11 SW I, 14 (Prosaschriften II), S. 116.
- 12 Vgl. Wiesinger/Steinbach, a.a.O., S. 19ff.
- 13 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 738.
- 14 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 740f.
- 15 Helmut de Boor (Hg.): *Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch. Wiesbaden 1967. S. 61.
- 16 谷口幸男訳「アイスランド サガ」1997年, 東京(新潮社)の566頁, 575頁および572頁を参照。
- 17 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 741.
- 18 *Das Nibelungenlied*, a.a.O., S. 146.
- 19 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 739.
- 20 SW II/9 (Tagebücher III, Nr. 2822), S. 313.
- 21 *Das Nibelungenlied*, a.a.O., S. 118f.

- 22 SW II /10 (Tagebücher IV, Nr. 3455), S. 278.
- 23 Vgl. Horacek, a.a.O., S. 742f.
- 24 中世文学において *singen und sagen* なる表現はしばしば見られるが、一般には抒情詩と叙事詩の両ジャンルを意味するが、とくにヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの場合は、抒情詩のなかで恋愛歌と格言歌を区別する際の表現である。Vgl. Benecke, Müller, Zarncke (Hg.): *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. Bd. II/2 Leipzig 1866. S. 17f. 拙著「オーストリア中世歌謡の伝統と革新。ヴァルター・フォン・デア・ヴォーゲルヴァイデを中心に」1995年、東京（水声社）、81-94頁参照。
- 25 SW II /9 (Tagebücher III, Nr. 2811), S. 310.
- 26 Christoph Cormeau (Hg.): *Walther von der Vogelweide. Leich · Lieder · Sangsprüche*. 14., völlig neubearbeitete Auflage der Ausgabe Karl Lachmanns. Berlin 1996. S. 185.
- 27 Vgl. Christa Ortman: *Der Spruchdichter am Hof. Zur Funktion der Walther-Rolle in Sangsprüchen mit milte-Thematik*. In: *Walther von der Vogelweide. Hamburger Kolloquium 1988 zum 65. Geburtstag von Karl-Heinz Borck*. Hrsg. von Jan-Dirk Müller, Franz Josef Worstbrock. Stuttgart 1989. S. 17-35.
- 28 Vgl. Horst Brunner, Gerhard Hahn, Ulrich Müller, Franz Viktor Spechtler: *Walther von der Vogelweide. Epoche Werk Wirkung*. München 1996. S. 187ff.
- 29 Vgl. Günter Schweikle (Hg.): *Walther von der Vogelweide. Werke*. Bd. 1: *Spruchlyrik*. S. 434f.
- 30 Walther, a.a.O., S. 61.
- 31 Vgl. Brunner u.a., a.a.O., S. 172; Schweikle, a.a.O., S. 401.
- 32 SW II /9, (Tagebücher III, Nr. 2394), S. 238.
- 33 Vgl. Friedrich Hurter: *Geschichte Papst Innocenz III und seiner Zeitgenossen*. Berlin 1834; Ludwig Uhland: *Walther von der Vogelweide, ein altdeutscher Dichter*. Stuttgart/Tübingen 1822.
- 34 Vgl. Hans-Uwe Rump: *Walther von der Vogelweide*. Reinbek bei Hamburg 1999. S. 39ff.; Schweikle: a.a.O., S. 402f.
- 35 SW II /11 (Tagebücher V, Nr. 3820), S. 111.
- 36 SW I /16 (Prosaschriften IV), S. 56.
- 37 グリルバルツァーにとって「詩 (Poesie)」はつねに「散文 (Prosa)」より上位に置かれるジャンルであり、両者の間には截然と線が引かれていた。そしてこのジャンルに対する考え方を、彼は一貫して堅持したのであった。「詩」が「散文」に取って代わりようとしたのが、まさにグリルバルツァーが生きた19世紀の特徴でもあった。彼はこうした事態に抵抗し、その挽歌として、『哀れな辻音楽師』(1848)という散文をもって「詩」の世界の終焉を描いた。これはまさに、「詩」の世界に生きる主人公である「辻音楽師」の没落の物語である。主人公がかるうじて「散文」の世界を代表する町娘に救われることによって、一縷の希望が仄見えはする。拙論「グリルバルツァーの *Der arme Spielmann* について」(大阪市立大学文学部紀要「人文研究」第36巻 第10分冊 1984年12月 55-68頁)参照。
- 38 SW II /7 (Tagebücher I, Nr. 32), S. 18.
- 39 拙論「いわゆるNatureingangについての一考察」(『セミナーウム』創刊号, 55-62頁)参照。
- 40 ヴォルフラムの『パルチヴァール』に対するグリルバルツァーの見解は彼の日記や書簡で繰り返し言及され、これにはヴァルターの歌謡以上の関心が注がれている。彼はこの叙事詩を「詩的 (poetisch)」な作品であると規定し、その理由として、多種多様に造形された具象的・絵画的表現を挙げている。この点でも、彼は自らの詩的原理に基づいた判断を下していることが理解されよう。